

# 現代フランス文学における亡命文学の意義と役割

## 論文要旨

(日本語・フランス語)

塩谷 祐人

生まれ育った国を離れ、遙か遠いフランスという地に移り住むことを余儀なくされた作家たちがいる。政治的、民族的、あるいは宗教的といった様々な理由によって引き起こされた作家と権力との対立が、彼らに亡命という選択を強いたからであり、その結果、彼らは母語以外の言語を表現の手段に選び、彼の地で、他者の言語を使いながら文学の世界に身を投じるようになったのである。こうした特殊な状況の中で、彼らは国家とは何かと考えを巡らし、個人の所属とは何かを問い、他の国にいる居心地の悪さを感じ、自らが異端であるという思いを抱き、抛り所を失ったという不安に耐え、自国の文化への愛着を深めながら、文学作品を生み出していく。

本論文では、こうした亡命の中で作られた文学作品が形成するひとつの作品群を「亡命文学」と位置付け、現代フランス文学における「亡命文学」の意義と役割、またその亡命文学を形成する作家たちが抱える諸問題を論じることを目的としている。「亡命文学とは何か」、そして「亡命文学を通すことで見えてくるものは何か」を解き明かす手がかりを得て、亡命文学研究の指針を提案することは、現代のフランス文学の有り様を考える上で重要であり、意義のあることになるに違いない。

「フランス文学の中にある亡命文学」の分析を行う本論では、フランス語で直接執筆している作家およびフランス語で書かれた作品を研究の対象とし、主にチェコ出身のミラン・クンデラ (Milan Kundera, 1929-)、ロシア出身のアンドレイ・マキーヌ (Andrei Makine, 1957-)、そしてハンガリー出身のアゴタ・クリストフ (Agota Kristof, 1935-2011) を中心に据えつつ、とりわけ彼らと祖国や辿り着いた国といった、ある特定の国や権力との間に結ばれている特殊な関係に注目し、幾人かの亡命作家を比較検討している。他の国からフランスにやってきた作家たちは、かつていた場所を忘れず、そして同時に、いまいる場所をなおざりにすることもなく作品を創りだしている。いかに諸処の条件が個々の立場や状況を異なるものにしていても、亡命を果たした作家たちの、あるいは亡命を描いた作家たちのいかなる作品にも、祖国との切断という痕が残っている。この痕跡が重要なのは、祖国を離れ、母語以外の言語で作品を書くことになり、そしてフランス文学の文脈で読まれることになる作家たちの内奥にある二重の所属意識が、作家にとって言語とは何か、作家にとって国家とは何か、またいわゆる「フランス」文学とは何かという大きな謎の一部を照らし出すからである。20世紀は革命や大戦、帝国主義の侵攻や全体主義の支配が人々の大規模な移動を生み出した時代であったが、この世紀におきたフランスにおける文学と亡命者の関係のかつて例を見ない展開は、こうした意味で考察に値する。

東ヨーロッパや中央ヨーロッパなどからやってきた作家たちがフランスに住む場所を求め、そのうちの少なからぬ者たちが直接フランス語で小説を書き始めたが、それは祖国や近い者たち、そして母語との切断を強いるものであると同時に、書くことの自由が得られるだけではなく、新たな言語と新たな境遇の中で、より複雑で、より深みある作品を精製する機会を得ることにもなった。彼らにとってフランス語は、文学を産み出す言語であり、また祖国や望郷の念、抑圧を強いる体制や外国軍に支配された生活を語る為の手段となる。一方で、外国語であるフランス語による執筆行為は、彼らに作家としてのアイデンティティを常に考えるように仕向ける。彼らは自らのルーツを決して忘れることがないまま、フランス語で執筆を続け、「フランスの」作家として仕事をするようになる。つまり、彼らの執筆言語の選択は単なる表現手段の選択である以上に、より実存的な問題に関わる

選択であると言えよう。

それでは自らの文学作品の創造のために言語を変えた作家はいったい何者であろうか。この疑問は亡命を経験した作家たちがしばしば直面する問題である。彼らが母語以外の言語で書き始める時、言語と国家とアイデンティティの間に存在する密接な繋がりを意識することになる。そしてひとたびこのことを意識すると、母語とフランス語の間に佇み、この言語、国家、アイデンティティの三つ巴を崩し、新たな自己を打ち立てるための探求が始まるのである。

言語が問題となるのは個人の所属に限ったことではない。亡命を果たしたことで多様に解釈されうる立場におかれる作家たちは、国民文学の定義も変える。国民文学という概念が、言語、執筆された作品による遺産、そして地理的な単位と切り離せないものであるという信条と強く結びついているなら、フランス語で書く外国出身の作家は、この概念をより複雑なものにするからである。とりわけ数世紀にわたって莫大な自国の文学的遺産を引き継いできたフランスにおいては、作家はフランス語で執筆するやいなや、「フランスの」作家として吸収されてしまう。ルーマニア出身のウジェーヌ・イヨネスコやアイルランド出身のサミュエル・ベケット、ロシア出身のナタリー・サロートといった作家たちが、しばしばフランス文学の作家として紹介されるという事実が例証しているように、極めて豊かに蓄えられた文学・文化資産と数世紀にわたって影響力を培ってきたフランス語によって、フランス文学は外国出身の作家たちをいわゆる「フランス文学」の中に組み込んできた。現代においては、フランス語で小説を書いている外国出身の作家が「フランス文学」の一部を形作っていると言っても過言ではない。

亡命作家は一度フランス文学の中に組み込まれると、今度はフランス文学の文学資本を増やすのに貢献することになる。フランス文学の方では、彼らの作品の価値をフランスの威光をもって保証し、普遍的な作品として喧伝することになる—もし彼らの作品がマイナー言語で書かれ、彼らの祖国だけでしか出版されなかったとしたら、彼らは無名なまま埋もれてしまっていたかもしれない—。この相互補完的な関係がフランスにおける亡命文学を特徴づけているのであり、まさにそれゆえ、フランス文学に組み込まれてしまった亡命作家たちは、何がフランス文学であるのかという定義を刷新し、フランス文学の新たな地平を切り開くのである。

全3部で構成される本論文では、第1部を「フランス文学の内部／外部にある亡命作家」の立場の分析に充てている。亡命作家がひとつの国を出て、フランスという別の国に移り、またフランス語で執筆することでフランス文学の枠組みで語られることになるにも関わらず、亡命作家とフランス文学との関係に注目してその意義を考察したものは今日までなされていない。しかしながら、とりわけ国民文学という概念が意味合いを強くした19世紀以降、外国出身の作家の立場は極めて曖昧なものとなりつつも、フランスにおいては多くフランス文学の作家として同化される傾向をみせており、それは国という軛から逃れてフランスに移り住んだ作家、もしくは国との切断を魂に刻んだまま作品を創り出す人々にとって、個人として、また作家としてのアイデンティティの問題と直結する避け難いものとなっているのと同時に、彼らの創作活動自体にも少なからぬ影響を与えていることは見逃してはならない。

例えば作家でありジャーナリストであったフランソワ・ヌリシエがマキーンヌの『ある人

生の音楽』(*La Musique d'une vie*, 2001)に関する記事を書くにあたって「1995年、『フランスの遺言書』がゴンクール賞とメディシス賞を受賞した時に、マキーンはフランス語で書くロシアの作家なのか、あるいはロシア出身のフランスの作家なのかという疑問が生じたが、この問題は解決するに値するものであろう」<sup>1</sup>と記しているが、亡命作家は絶えずその種の問題に直面することになる。無論、マキーンがロシアの作家であるのか、あるいはフランスの作家であるのかという決定は、個々の重視する点によって容易に逆転するものであるため、本論ではその点を追求することを目的とはしていない。むしろここで重要なのは、そうした問題提起がなされること、より正確に言うならば、ひとりの亡命作家は、フランス文学の内側にいるものとして考えることもできれば、フランス文学の外側にいると考えることもできる、その二重性において特徴づけられるという点である。亡命文学の研究はフランス文学が内包している同化作用をはじめとする亡命作家を取り巻く状況を照らし出すものでもあり、それと表裏を成すように、亡命作家の立場と作品を分析するにあたっては、まずはフランスが如何に外部の文学を内側に同化、吸収する力をもつシステムを構築しているのかを示すことから始めることで、その特色が明らかになるのである。

フランスに活動の拠点を移した彼らにはフランスへの従属が求められる。そしてまさにこの亡命作家を取り巻く状況からの逃走、あるいはアイデンティティを決定することに対する闘争の試みが、彼らの小説を支えているのである。この視点にたった上で、ミラン・クンデラの『無知』(*L'Ignorance*, 2003)を分析してみると、その特異性と亡命作家の含み持つ思いや文学のダイナミズムを浮き彫りにすることができるだろう。『無知』はクンデラがフランス語で書いた三作目の小説であり、亡命者が祖国に戻ることを主題とした作品であるが、クンデラはこの作品をフランスではなく、まず翻訳を通じてスペインや日本で発表した後、二年の時を経てフランスでオリジナル版を出版している。こうした特殊な出版状況が耳目を集めたことは確かであるが、クンデラがなぜそうした選択をしたのかという点に踏み込んだ議論はなされてこなかった。最も有力な推測としてまことしやかに語られていたのは、『無知』以前にクンデラがフランス語で執筆した作品の『緩やかさ』(*La Lenteur*, 1995)と『ほんとうの私』(*L'Identité*, 1997)がフランスで痛烈に批判されたため、それに心を痛めたクンデラは外国で先に出版したのではないかというものであった。しかし、フランスの同化作用、そして国民文学という概念を拒むクンデラの姿勢を考慮するならば、むしろ『無知』の翻訳による先行出版という試みは、「フランス」文学からの脱却を測ってのことではないかという仮説を立てることができる。というのも、クンデラは「ヨーロッパはみずからの文学を歴史的な統一体として考えることができなかつたのであり、(中略)そこにこそ、ヨーロッパ取り返しのつかない知的失敗がある」<sup>2</sup>と、文学が個々の国の国民文学の総体としてみなされてきたことへの批判を綴っており、それはクンデラがフランスに移り住み、後にフランス語で執筆するようになるにつれて「フランスの作家」として受容されてきた経緯と呼応した形で表面化してきた主張であるからである。つまりフランスでの出版を優先しないというクンデラがとった戦略は、フランス文学に吸収されることへの異議申し立て、すなわちフランス文学の外に留まろうとする作家の意思とフラ

<sup>1</sup> François Nourissier, « Musique d'exil », *Le Point*, Février 2001.

<sup>2</sup> Milan Kundera, *Le Rideau*, Paris, Gallimard, 2005.

ンス文学の吸引力とのせめぎ合いから生まれた、文学の意義を問い直す行為であると捉えることもできるのである。

ところで、亡命作家の作品がフランス文学に吸収される原因の最も大きなものとして、彼らがフランス語で執筆していることが挙げられる。文学が言葉を使った芸術である以上、言語の問題は避けられないものであり、彼らの言語は作家としての表現手段であるのみならず、所属の問題とも切り離して考えることはできない。そこで本論文の第二部は、亡命作家の言語に焦点を当ててマキーン、クンデラ、クリストフの作品を分析している。アンドレイ・マキーンの自伝的小説の『フランスの遺言書』は、フランス人の祖母を持つロシア人の少年が、ヨーロッパへの憧れと自らのアイデンティティの揺れ動きを抱きつつ、二つの国の間にある自己を肯定するに至る物語として読むことができるが、言語に注目して分析すれば、ロシア語とフランス語の間にいる少年が、マキーン本人が言う「普遍言語(*la langue universelle*)」を発見し、その言語を用いて作家になることを決意するまでの物語と読み直すことができる。これはマキーンのみならず複数の言語に精通した作家にみることができることであるが、彼らはフランス語と母語の間に立つことで、そのどちらにも属さない言語を見出すことを試み、その言語を用いて作品を創り出す。ここで興味深いのは、それが複数言語を自由に使いこなせるという特権的な状況によって可能になっているのではない点である。むしろマキーンの小説から読むことができるのは、自らの言語が複数の言語の往復の中で行き詰まりをみせ、外国語を使っているのだという強烈な啓示にも似た発見をしたときに可能になるという、二言語併用者が言語の狭間で新たな言語を発見する過程である。

マキーンが複数の言語の間隙に落ち込むことで普遍言語を発見することができた作家であるとするなら、ミラン・クンデラはフランス語とチェコ語の差異を取り払おうとした作家である。ヨーロッパ文学を支持するクンデラは、どの言語で書かれていたとしても差はないという立場を取り、作品を理解するのにその作品が書かれた言語に精通している必要はないときえ言い切る。それはチェコ語で執筆した作品のフランス語訳を自ら見直し、手を加え、「チェコ語と同等の真正さをもつ」と保証したのみならず、使用する単語を語源まで遡って説明を加えたりすることで、チェコ語とフランス語という彼が使用する二つの言語をできる限り同一のものにしようとする試みからも伺い知ることができる。「作家はひとつの言語の囚人ではない」と言ったチェコの詩人であるヴェラ・リンハルトヴァーの宣言に賞賛と同意を示したクンデラは、フランス語とチェコ語という執筆言語による区別をなくすことで世界文学を自らの作品で体現しようと果敢に挑んでいるのである。

クリストフの作品からは、亡命作家がもつ言語へのもうひとつの思いを伺い知ることができる。彼女はとりわけフランス語で書くことへの困難を隠さない作家であるが、それは単に外国語で書くという不自由さへの不平ではない。それよりも原因は、フランス語が彼女にとって「敵語(*La langue ennemie*)」であり、彼女の母語を殺しつつあることを認めながらも、その「敵語」で小説を書くところにある。ハンガリーへ望郷の念を抱く彼女に、アイデンティティの揺らぎはない。だがそれ故に、フランス語で書き、フランス語で生活するにつれて母語を忘れつつあるという実感は、彼女を苛む。クリストフは自らの作品の中で「母語は何ひとつ忘れない」と登場人物に語らせているが、それとは裏腹に、実生活では母語を忘れつつあると感じていた。そうした意味で、クリストフにとってフランス語

による執筆は国境を越えた文学の解放をもたらすものというよりも、魂の拠り所を攻撃する自傷行為に近いものであった。クリストフは書くことが自殺に近いことだとあるインタビューで述べているが、それは単に執筆の困難を語っているというよりも、自分の中のハンガリーが消失していく現実を見据え、その受け入れ難い現実をフランス語でフィクションにすることで亡命によって負った傷を開く苦しみ of 表明と受け取るべきだろう。クリストフにとってのフランス語での執筆は、文学による自己の解放やフランス文学との同化に向かうのではなく、むしろ彼女の内奥にあるハンガリーと母語を傷つけることであえてそれらを忘れえぬものにしようとする抵抗であり、彼女の作品は小説の形として結晶化した亡命者の苦渋として読むことができるのである。

しかし、クンデラにせよ、マキーンにせよ、クリストフにせよ、あるひとつの国の言語としての「フランス語」ではない、いわゆる「小説家の言語」としてのフランス語をそれぞれが探っているものの、ジャンルとしてのフランス文学、そして国語としてのフランス語の求心力は容易に逃れることができるものではない。そこに亡命作家とフランス文学との特殊な関係が生まれるのである。本論の最終部となる第三部では、第一部と第二部を総合する形で、この特殊な関係性を分析している。

フランス語で書く亡命作家はフランスの力で文学の領野において聖別化され、かつフランス文学を構成するものとして、すなわちフランス文学の多様性とその文学資産の豊かさを証明するものとしての役割を担うことになる。もちろん文学作品がどの国の文学に属しているかは問題ではなく、それによって作品の価値は左右されるものではないという考え方は十分に納得できるものでもある。とはいえ、現実には国民的帰属というのはもっとも重く、もっとも強制力が強い決定要因のひとつであり<sup>3</sup>、とりわけ亡命文学の考察においては、文学の普遍性を信頼するだけでは亡命を果たした作家の作品に認められる叛逆の念、あるいは作品から滲み出てくる苦しみ of 思いを見落としかねない。むしろ亡命作家の作品がその存在感を発揮するのは、逆説的にもそうした国家的な枠組みの中に捉えられた時である。

亡命作家は自らの小説が祖国の歴史や文化と結びつけられて解釈されうる、すなわち必然的に小さなコンテキストで読まれることを知っており、またフランス語で書くことによりフランス文学の一部となることもわかっているながら、いやわかっているからこそ、文学の力を信じ、一義的な現実に対抗するものとして、多義的な文学という構図を打ち立てる。

「最初の小説のときからわたしを揺り動かしているのは、社会によって練り上げられ、押し付けられた定義の中にわれわれを閉じ込める、理性的で明白なことに抵抗するという欲望でした」<sup>4</sup>と語るのはアンドレイ・マキーンだが、作家たちは多かれ少なかれ文学の自律を求め、文学作品を練り上げる。

だが、亡命文学を、内部に取り込むフランスの文学システムと外部に留まろうとする亡命作家の思惑という二項対立の中で読み解いてはならない。重要な点は現実的にフランス文学というシステムが亡命者たちの作品を保証し、普遍化し、フランス文学として拡散させる一方で、亡命作家の作品は異国的な要素を失うこと無しにフランス文学の射程を広げ、

---

<sup>3</sup> Cf., Pascale Casanova, *La République mondiale des Lettres*, Paris, Seuil, 1999.

<sup>4</sup> *Lire*, Février 2001.

その文学資産を補強し、より彼ら自身の作品の特異性を際立たせるという相互関係にあることである。亡命文学とは国から逃れた亡命の中で書かれた文学のことではない。むしろフランスという強大な国の文学の中から、さらにもう一度、どこでも無い場所への亡命を試み続ける作家たちによって作られている文学なのである。マキーンヌやクリストフ、そしてクンデラたちがフランスへの同化と叛逆を同時に行うことで作り上げた文学は、フランス文学という土壌の内部に、複数の国が互いを打ち消し合うことなく同時に存在することができる場を生み出す。フランス文学でありながらフランス文学の外部にあるもの、フランス文学でありながらフランス文学を内側から解体し再構築するもの、それこそがフランス文学における亡命文学の力であり、その中には文学と国とを結びつける小さなコンテクストによる読みを打破する、世界文学へと開かれる可能性が秘められているのである。